巻頭言

全国よい仕事研究交流集会2013が問うこと

藤田　徹（日本労働者協同組合（ワーカーズコープ）連合会　センター事業団　理事長）

2014年２月15日、16日に東京都千代田区の日本教育会館で、「全国よい仕事研究交流集会2013」が開催された。前日の大雪の影響で、予定していた人数の半分の参加者になってしまったが、ワーカーズコープのよい仕事集会の画期をなす歴史的な集会となった。

この集会は2013年、秋より労協連が開催してきた４つの分野別（自立支援、建物総合・コミュニティ施設、ケア、子ども・若者）集会の総括集会でもあった。

この集会から私が学んだことをあげるとすれば３つある。

１つ目は、「よい仕事とは、命を生かし、輝かすものである」という確信である。そのことを象徴したのが、初日の直木賞作家の天童荒太氏と連合会の永戸理事長の対談であった。天童氏は、映画「ワーカーズ」がポレポレ東中野で封切られたときに、わざわざ足を運んでくださった作家である。そのときの以下の様な感想に私たちは驚かされ、そして興奮した。

『自分たちが協同で仕事を作り（見い出し）、協同で経営・運営し、大企業や政治・行政では手の届かない人々・場所への働きかけをおこなって、本来の幸いへとイノチをつなげていく、このワーカーズコープや各種NPOのあり方は、これからますます求められ、増えていくだろう。

なぜなら、これは、人間がこの世界で生き延びてゆくための数少ない選択肢の中で、地道だけれど、とても有効な一つの道だから。』

（「歓喜の仔」Facebook特設ページ
天童荒太コラム　Vol. 72）2013. 2. 4

特にワーカーズコープの様な働き方（協同労働）が「本来の幸いへとイノチをつなげていく。」という言葉がいったいどういう意味なのか、ずっとひっかかっていた。

天童氏はこの対談で

『歓喜の仔を書いているとき、日本は非常に生きづらい社会になりつつある。特に若い世代にしわ寄せがきている。膨大な借金を背負わされ、放射能が流れ、競争を強いられ、敗れれば自己責任の名のもとに切り捨てられる。それでも人間は生きていく価値があるのか、生き抜いていけるのかということをこの物語で考え抜いてみたかっ

た。原稿を書き終え、映画「ワーカーズ」を観た。ワーカーズは共に生きていこうという理想をもって自分たちで必要とされる仕事をつくっていく。そこから上がる利益は決して多くはないだろうが、共に働く者の笑顔があり、感謝があり、困ったときには助け合う。つらくなるばかりの世界の中で、本当に人間が生き延びていけるとしたら、こういう働き方、こういう社会のつながり方しかないのかもしれない。数少ない選択肢の中の１つという思いがあった』と語っている。

「本来の幸いへとイノチをつなぐ」仕事が協同労働であり、よい仕事の究極の目指すところなのである。

経済成長至上主義や資本の論理の延長に、人間の幸せはないこと、また自然を含むすべての命の循環こそ、人間を人間たらしめていること、このこその価値が改めて問われた集会であった。

２つ目は「当事者主体」という言葉の重みである。

このことの意味を最も象徴したのが、１月に早稲田大学において開催された「子ども・若者フォーラム」であった。「難民高校生」を著した「仁藤夢乃」さん。大阪のホームレスのおっちゃんたちの力を引き出した川口加奈さん。「私たちは仕事のできる小学生です」という名言を放ち、自前の児童館づくりに向かっている鹿児島「国分ほのぼの」の小学生たち。

まさに大人側の子どもや若者の見方が問われた集会だった。私たちは知らず知らずのうちに「子どもは守るもの」「できることの少ない未熟な存在」という見方をしてしまう。それは高齢者ケアでいえば「してあげる介護」となる。

「サービスの提供者」と「客」(受け手)という分断や「料金に見合うサービス」「賃金にみあう労働」といった、市場の考え方に知らず知らずのうちに意識が組み込まれてしまっているのではないだろうか。

そうではなく、問題を抱える当事者・市民の中にこそ力やエネルギーや知恵があり、それは豊かな協同関係の中でこそ、引きだされるということを改めて知った。

３つ目は、総合性とコミュニティの復権の大切さである。

人間の暮らしは、様々な人々の労働の総体によって支えられ、地域という社会の中で成立している。

しかし現代は、人々が孤立し、お互いの関係性が見えず、金銭で全てのサービスを買うという生活に慣れきらされている。

千葉の北総地域での実践や、兵庫の豊岡の実践は、労働のつながり、自然を含む地域のもつ豊かさ、総合性を活かすことのすごさを語っている。

視野狭窄社会の中の自己中心主義では、結局、自己さえ救われないということである。「人と社会の総合性を取り戻す斗いへ向かえ」といわれているような気がした。

以上、３つのことを強烈に感じた集会だった。

人々が分断された先に、新しい市場が生まれる現代において、私たちが地道に日々行っている協同労働によるよい仕事は、人と人とをつなぎ、人と社会の総合力の再生に向かう仕事であるということに、誇りをもっていいのだと大きな声で組合員に伝えたい。共に「新しい現実」の創造に向かおう。